

虹に響く笑い声

ある精霊の物語

和泊町立和泊中学校 一年 八木 沙悠

鹿児島市から船で十八時間。そこには、隆起珊瑚礁からなるアダン島がポツリと浮かんでいる。この島では昔からガジュマルの木にはヒーヌムンという精霊が住んでいるといわれている。ヒーヌムンは島の守り神であり、時に恐れられ、時に敬われた。ヒーヌムンが泣くと雨が降り、ヒーヌムンが笑うと日が照り出す。そんな精霊も今では数が減り、見える人間もいなくなつた。

今日もヒーヌは木の上で寝ているだけだった。魚も釣れなければ風も吹いていないから飛ぶこともできない。ヒーヌはいつも一人で過ごしていた。

「それっ。」

やんちやな男の子に向かってイモムシが飛んでいく。

ヒーヌは大のイタズラ好きでもある。

「うわあ、イモムシだっ。」

バタバタと暴れる男の子を、お腹をかかえて笑って見ていると、

「えいっ。」

と声がした。ヒーヌが声の方に目をやると、やんち

やとは真逆の様な雰囲気の子が見えた。逆上がりか苦手らしく、必死に鉄棒にぶら下がっている。ヒーヌが興味深そうに見ていると、ツルツと男の子の手が鉄棒から離れた。

「あ、危ないっ。」

ヒーヌは慌てて風を送った。ユサユサと木がゆれた。風は男の子の下でくると回り、男の子はトスンと尻もちをついた。ヒーヌはホッと胸をなで下ろした。男の子は目を丸くして、首をかしげながら教室に走っていった。

次の日、ヒーヌはクルクルと木の枝で逆上がりをしていた。すると懸命に走ってくる少年が見えた。昨日の男の子だった。

「ね、ねえ、ヒーヌムン。昨日は僕を助けてくれたの。どこにいるの。」

ヒーヌは驚いて声さえも出なかった。

「僕はね、ユウキっていうんだ。優しい樹って書くんだよ。君にも名前はあるの。」

何十年ぶりだろう。オイラにも話しかけてくる子がいるなんて。きつと見えてはいないんだらうけど。ヒーヌは身をのりだした。

「ねえ、ヒーヌムンいるんでしょ。昨日はありがとう。僕、きつと逆上がり上手になるよ。」

そう言うのと優樹は走って教室に帰っていった。

「どうしよう。返事をしようかな。それとも止めようかな…。」

一日中迷ったが、ヒーヌは返事をするのを止めた。優樹がこわがるのを恐れたのだ。それでも優樹は毎日毎日ヒーヌに話しかけてくる。

「今日は初めて逆上がりができたんだ。」

「かけ算が言えるようになったんだよ。聞いていてね。」

うれしそうに話す優樹はかわいらしく、いつの間にか毎日の話を聞くのがヒーヌの日課となっていた。そんなある日。優樹はいつもの様子とはうって変わって、とぼとぼと歩いてきた。

「あのねヒーヌムン。僕、留学するんだ。今までありがとう。」

「え、何。リウガクって何。なんでそんなにさみしい顔をしているの。」

「留学」の意味を理解できなかったヒーヌは優樹のさみしげな様子も理解できなかった。

翌日、優樹はヒーヌの元に現れなかった。

その次の日も、次の日も。校庭にも教室にもその姿は無かった。

ヒーヌは落ち込み、前の様な元気な姿の面影はど

こにも見られなくなった。

「どうせまたオイラは一人なんだ。みんな忘れていくんだ…。」

ヒーヌが落ち込んだことでガジュマルも弱っていき、島もだんだん汚くなっていった。

優樹が留学してから何年たっただろう。弱り果てたガジュマルの上にヒーヌは背中を丸めて寝ていた。そこに一台の観光バスが停まった。十人程の若者が降りて来る。

「おい、この島、なんか汚いよな。」

「来た価値が無いっていうかさ。」

ヒーヌは必死に怒りをおさえた。すると口々に文句を言っていた若者らがガジュマルを見上げた。

「この木のどこが日本一なんだ。ただの枯れかかった木だよ。」

「本当、つまらねえ。もう帰ろうぜ。時間の無駄だ。」それまでじっと黙っていたヒーヌが怒りのあまり、体をふるわせた。

「どうしてオイラ達がこんなことを言われるんだ。もう嫌だ。人間なんて…。」

ポロポロとヒーヌの目から涙がこぼれた。空は暗い雲でおおわれ、大雨になり雷が轟いた。風も強くな

る。ガジュマルもバサバサと風にあおられ、今にも倒れそうだ。若者達は急いで帰っていった。それでもヒーヌの怒りはどんどん増すばかりだ。ヒーヌは自分でもどうしていいのか分からなかった。

「ヒーヌムン。どうしたんだよ。」

突然大荒れの中に若い男の声が響いた。ヒーヌは涙でぼやけた視界を見つめた。

「優樹…。」

もう成人ぐらいだろうか。ヒーヌが見下ろした先には優樹と島の若者達の姿があった。みんな、ガジュマルを倒すまい、と必死に支えている。

「ヒーヌムン、いるんだろう。僕は君やガジュマルや島の自然が大好きだから帰ってきたんだ。ヒーヌムンが元気で笑顔だから島の美しさが生まれるんだ。」

ヒーヌは優樹の言葉をじつと聞いていた。

「ヒーヌムン、笑ってくれ。元気でいてくれ。僕は君の笑顔を見ることはできない。だけど、島の活き活きとした自然で君の笑顔を感じたいんだ。」

ヒーヌは目を閉じた。忘れかけていた思い出が胸を熱くする。

「優樹…みんな…。忘れないでいてくれたんだね。オイラ、一人じゃないよね。」

ヒーヌは顔を上げて手をグリーンとのぼした。すると空を厚くおおっていた雲は流れ、折れた枝も散った葉も元の活き活きとした姿に戻った。島が元気を取り戻したのだ。

ヒーヌは泣いていた。静かできれいな涙だ。

「あれ…雨だ。」

一人の若い男がつぶやいた。しとしと降る雨は太陽にキラキラと反射した。

空には、大きな虹がかかっていた。

やがて、ヒーヌもガジュマルも、すっかり元気を取り戻した。堂々と地に根を張る日本一のガジュマルの下、今日も子ども達の笑い声が響いている。